

ブラジルにおける太鼓の定着と拡がり ——ブラジル太鼓協会の活動を中心として——

中野紀和

Establishment and Expansion of Taiko in Brazil: Focusing on the Activity of “Associação Brasileira de Taiko”

Kiwa NAKANO

はじめに

世界各地の日系人コミュニティで、太鼓の人気の高まっている。ハワイやアメリカ本土でもエスニック・フェスティバルが開催され、太鼓の受容と拡がりに関しては多くの報告や分析がある。たとえば1960年代から70年代にかけてのアメリカでの太鼓の拡がりを日本社会との関係に注目した小長谷は、世代とジェンダーという観点から論じている。なかでも太鼓の形や数といった制約を受けずに柔軟な編成が可能な組太鼓のあり方に、敗戦を経た世代が新しい「日本」を模索するプロセス、そして敗者（弱者、ジェンダーのアナロジーにおいては女性化）として位置付けられる「日本人」を、太鼓の男性性を強調することで、強者として位置付け直そうとするものだと指摘している [小長谷 1985, 2002]。そこでは太鼓を「日本人及び日系アメリカ人のエスニシティを象徴し、主流社会への抵抗を内在するもの [小長谷 2002: 113]」として捉えている。当時のエスニック・リバイバルにおける太鼓の捉え方としては妥当な指摘であるといえる。太鼓のパフォーマンスは、エスニック・イメージやジェンダー規定などのカテゴリーのあり方が相対化される場だといえる。ブラジルでも近年、短期間に太鼓グループが結成され、技術的にも目覚ましいものがある。これは、2008年のブラジル日本移民百周年記念行事（以下、百周年記念行事と略す）という大きな目標があったことに加え、2004年に発足したブラジル太鼓協会という日本に直結した組織の存在が大きい。ブラジル以外の国々における太鼓の普及のあり方と異なるのはこの点である¹。

また、ブラジル社会へ同化していく日系ブラジル人の若者をみると、近年の太鼓の拡がりや定着に対して、小長谷の分析と同様の捉え方をすることは難しい。それは百周年記念行事のなかにも一端をみることができる。既に別稿で論じているので詳述はさけるが、日系3世の女性がこの記念行事の一環として企画したイベントは、グラフィッチ（通りの壁の落書き）というブラジルの若者文化を表現手段として、非日系の若者たちがストリートに日本絵巻を制作するという斬新な内容

であった[中野 2010]。ブラジル社会のなかで日系人と非日系人の境界が曖昧になっていることを示すものである。このグラフィッチイベントには日常における社会関係が表出されていた。

そこで本稿では、太鼓の活動をパフォーマンスの実践の場として捉え、太鼓チームの結成が相次いだ百周年記念行事の前後を中心に、どのような人びとが、どのように太鼓に関わっているのか、という点を明らかにする。特に、記念行事の参加に際して重要な役割を果たしたブラジル太鼓協会の活動とそこに所属するチームのあり方に着目する。なお、本稿のデータは、2009年から2011年の8月に実施した調査によって得られたものである。

1. ブラジル太鼓協会の設立と活動

1-1 設立の経緯

ブラジルの太鼓チームの多くは、サンパウロ市のブラジル日本文化福祉協会の建物のなかにある「ブラジル太鼓協会 (Associação Brasileira de Taiko、通称アベテ A.B.T.)」に属している(写真1)。同協会の会長を務めるのは福岡県人会のY氏であった²。2002年に福岡県からブラジルの福岡県人会へと太鼓が寄贈され、彼はそのときに同県人会の役員も務めていた。寄贈された太鼓が打てるようにと、JICAへ指導者の派遣を打診したところ、福岡県で太鼓を教えていたAさんがシニアボランティアとして派遣されてきた。このとき、福岡県人会は他の県人会にも声をかけ、太鼓の指導を受ける体制を整えた³。

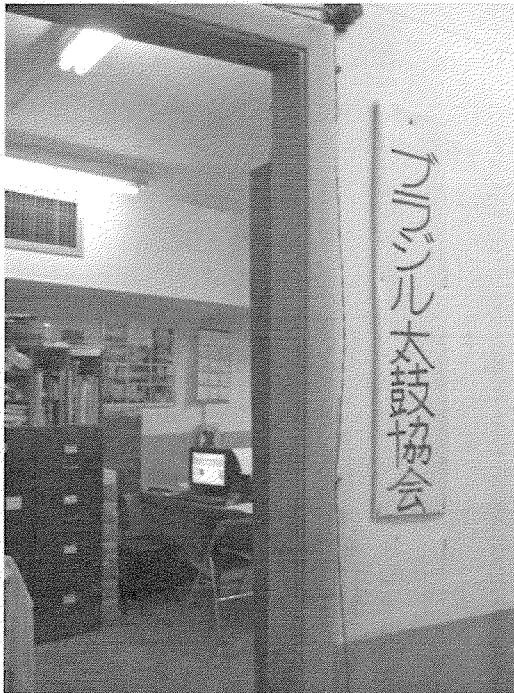


写真1: ブラジル日本文化福祉協会内にある
ブラジル太鼓協会

Aさんはブラジル各地で2004年7月から指導を始め、2006年7月に帰国する。同年10月にはブラジル独自にブラジル太鼓協会が設立された。この後、日本の太鼓連盟に指導員を要請し、日本との関係ができていく。時折、日本から指導員が来ることはあったが、2007年にJICAからMさんが派遣されてくるまでは、実質的には指導者のいない期間が続いた。

「日本太鼓連盟」と「ブラジル太鼓協会」は名称が似ているために、ブラジルの組織は日本の下部組織のように思われがちであるが、財政的には独立している。指導の仕方は、指導員が太鼓連盟の1級公認指導員であることから、日本のやり方を踏襲している。

同協会に所属するチーム名と地域は次の表のとおりである(表参照)。サンパウロ州が圧倒的に多く、次いでパラナ州となっており、これは日系人の多い地域と比例する。リオ・デ・ジャ

ブラジルにおける太鼓の定着と拡がり

表：ブラジル太鼓協会所属のチームとその変遷

	所属団体	地名	州	所属の有無				備考
				2008	2009	2010	2011	
1	Yooshin Daiko	Apucarana	PR	○	○	○	△	活動停滞
2	Ryuumei Wadaiko	Araçatuba	PR	○	○	○	○	
3	Kyoushin Daiko	Arapongas	PR	○	○	○	—	
4	Nippon Country Club Taiko	Arujá	SP	○	○	○	○	マスター※1
5	Wakaze Taiko	Arujá	SP	○	○	○	○	
6	Assaí Taiko	Assaí	PR	○	○	—	—	
7	Seishun Daiko	Astorga	PR	○	○	○	○	
8	Kawasuji SeryuuDaiko	Atibaia	SP	○	○	○	○	
9	Shouryuu Daiko	Bastos	SP	○	○	○	○	
10	Mugenkyo Wadaiko	Bauru	SP	○	○	○	○	
11	Raijin Daiko	Belo Horizonte	MG	○	○	○	○	
12	Miyako Daiko	Brasília	DF	○	○	○	○	
13	Hikari Daiko	Brasília	DF	○	○	○	○	
14	Hikari Daiko	Cambé	PR	○	○	△	△	活動停滞
15	Ryuusei Taiko	Cambuí	SP (市内)	○	○	○	—	退会※2
16	Wadaiko Tsubame	Campinas	PR	○	○	○	○	
17	Capão Bonito	Capão Bonito	SP	○	○	—	○	復活
18	Hakuryu	Carlópolis	PR	○	○	—	—	
19	Kokorozashi Taiko	Castro	PR	○	○	○	—	
20	Hishoo Taiko	Colônia Pinhal	SP	○	○	○	○	
21	Tamashii Taiko	Cotia	SP	○	○	○	○	
22	Hanabi Wadaiko	Cuiabá	MT	○	○	○	○	
23	Wakaba Taiko	Curitiba	PR	○	○	○	○	
24	Heiwa Taiko-kai	Guaira	SP	○	○	○	○	
25	(太鼓協会への名称申請なし)	Guatapar	SP	○	○	—	—	
26	Kyoushin Daiko	Goinia	GO	—	○	—	—	
27	Ryuubu Daiko	Ibina	SP	○	○	○	○	
28	Ryuu Taiko	Indaiatuba	SP	○	○	○	○	
29	Ishindaiko	Londrina	PR	○	○	○	○	
30	Isin Ladies	Londrina	PR	○	○	○	—	
31	Miryoku Daiko	Itaquaquecentuba	SP	○	○	○	—	
32	Sakura Fubuki Taiko	Itaquera	SP (市内)	○	○	○	○	非日系約 25%
34	(太鼓協会への名称申請なし)	Ituverava	SP	○	○	△	—	
35	o Wani Taiko	Osasco	SP	○	○	○	○	
36	Todoroki Daiko	Jales	SP	○	○	○	○	
37	Houkou Daiko	Jundi	SP	○	○	○	○	
38	Gunma Taiko	Liberdade	SP (市内)	○	○	○	—	
39	Doobo Taiko	Loanda	PR	○	○	○	○	
40	Hibiki Wadaiko	Maril	SP	○	○	○	○	
41	Wakadaiko	Maring	PR	○	○	○	—	
42	Yuurin Taiko	Mau da Serra	PR	○	○	○	○	
43	Todoroki Daiko	Osasco	SP	○	○	○	○	
44	Tatakinan	Paraba	PB	○	○	○	○	
45	Kotobuki Taiko	Paranav	PR	○	○	○	○	
46	Taiyo Wadaiko	Pereira Barreto	SP	○	○	○	○	
47	Hakuryuu Taiko	Piedade	SP	○	○	○	○	
48	Shinsyuu Daiko	Pilar do Sul	SP	○	○	○	○	
49	Aozora Gakkyuu	Projeto Integrao Pr-autista	SP (市内)	—	○	○	○	

50	Ponta Grossa Taiko	Ponta Grossa	PR	○	○	○	○	
51	Yuukyo Gumi	Presid.Prudente	SP	○	○	○	○	
52	Dantai Fênix	Presid.Prudente	SP	○	—	○	○	
53	Ribeira Ryofu Taiko	Registro	SP	○	○	○	○	
54	Yukio Yamashita Taiko	Rib.Preto	SP	○	○	○	○	
55	Rio Nikkei Taiko	Rio de Janeiro	RJ	○	○	○	○	マスター※1
56	Yuuwa Daiko	Rolândia	PR	○	○	○	○	
57	Heisei Gakuen	Santa Cruz	SP (市内)	—	○	○	○	
58	Akai Ryu Taiko	Santa Fé do Sul	SP	○	○	○	○	
59	Himawari Taiko	Sto Amaro	SP	○	○	○	○	
60	Gakushuukan	Santo André	SP	○	○	—	—	
61	Yuushin Taiko	Santo André	SP	○	○	○	—	
62	Harmonia	S.Bernando Campo	SP	○	○	○	○	
63	Mizuho Taiko	S.Bernando Campo	SP	—	○	○	○	マスター※1
64	Shinkyō Daiko	S.Caetano do Sul	SP	○	○	○	○	
65	Hatsumi Taiko	S.J. do Rio Preto	SP	○	○	○	○	
66	Kyōkoku Daiko	S.J. dos Campos	SP	○	○	○	○	
67	Seiryū Daiko	S.Miguel Arcanjo	SP	○	○	○	○	
68	Tenryū Wadaiko	S.M. Paulista	SP (市内)	○	○	○	○	
69	Kyōwa Daiko	São Vicente	SP	○	○	○	○	
70	Mika Youtien	Saúde	SP (市内)	○	○	○	○	
71	Inazuma Taiko	Sorocaba	SP	○	○	○	○	
72	Fukuhaku Taiko	Suzano	SP	○	○	○	○	
73	Karula Taiko	Suzano	SP	○	○	○	—	
74	Kouran	Suzano	SP	○	○	○	○	
75	Kaito Shamidaiko	Taubaté	SP	○	○	○	○	
76	Kaminari Wadaiko	Tupã	SP	○	○	○	○	
77	Seishin Daiko	Umuarama	PR	○	○	○	○	
78	Kodamakai	Vargem Gde Paulista	SP	○	○	○	—	
79	Soyo-Kazé Taiko	Votuporanha	SP	○	○	○	—	
80	Bon Odori Atibaia	Antibaia	SP	—	—	○	—	
81	Hanafubuki	Centro-Liberdade	SP (市内)	—	—	○	○	
82	Heisei Taiko	Zona Norte-Imirin	SP (市内)	—	—	○	○	
83	Fuuga Kazan Taiko	Manaus	AM	—	—	○	○	
84	Kitsume Taiko	Zona Norte-Santana	SP (市内)	—	—	○	○	
85	(太鼓協会への名称申請なし)	Valença	RJ	—	—	—	○	
86	Yanagi Taiko	São Carlos	SP	—	—	—	○	
87	Tateru Taiko	Saint Amaro União	SP	—	—	—	○	

(ブラジル太鼓協会のデータを基に筆者作成・データは2011年8月現在)

※ 州名はすべて略表記。SP (サンパウロ州)、PR (パラナ州)、RJ (リオ・デ・ジャネイロ州)、SC (サンタ・カタリーナ州)、DF (連邦首都)、MG (ミナス・ジェライス州)、PB (パライバ州)、MT (マツ・グロソ州)、AM (アマゾン州)

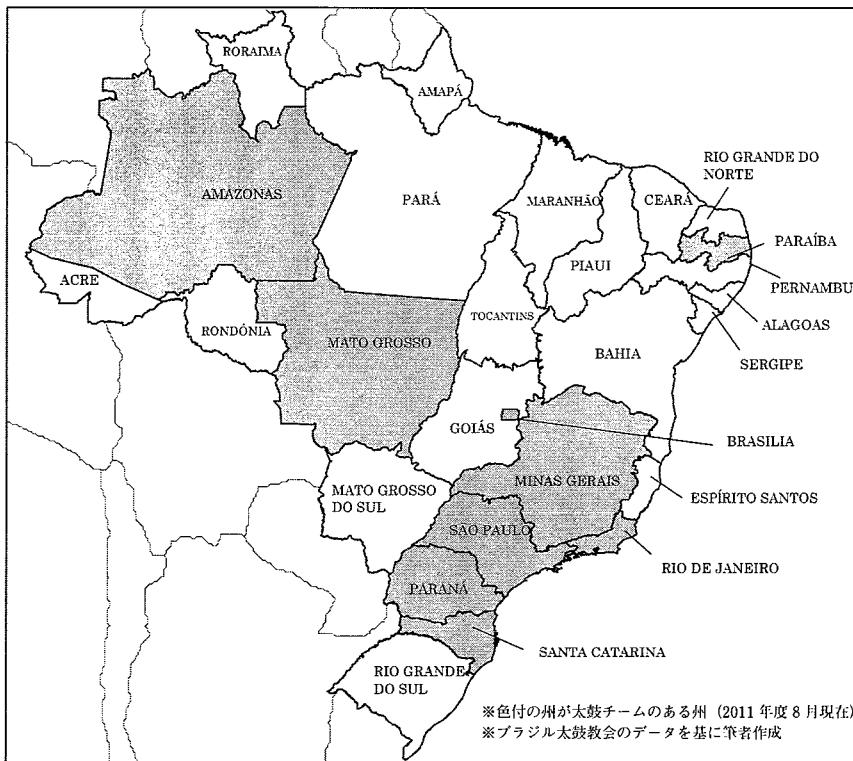
※1 50代と60代が中心となっているチーム

※2 ブラジル太鼓協会を退会し、宮城県人会へ移ったチーム

ネイロやミナス・ジェライス、マツグロツソ、ブラジリア等にも登録チームは存在するが数は少ない（地図参照）。前述した A さんによる 2 年間の指導で、太鼓が徐々にブラジルに拡がり、チーム数は約 40 にまで増えた。A さんの帰国後は継続的に指導する人はいなかったが、いろいろなチームが各種イベントに参加していたこともあり、次第に太鼓の人気は高まっていった。その結果、2007 年に JICA から新たに M さんが派遣されてきた時は、60 チーム前後にまで増えていた。

M さんは宮崎県の太鼓連盟（日本太鼓連盟所属）の会長経験があり、海外での指導を自ら希望して、JICA の試験を受けて渡伯したのであった。2008 年の百周年記念行事の一つ、「千人太鼓」の責任者でもあった彼が一大イベントを終えて 2009 年に帰国する頃には、登録チーム数は 80 チームを越すまでに増加していた。その後、M さんは 2010 年 7 月から再度 1 年間の予定でブラジルに滞在し、太鼓の指導を続けている。

同協会に入るメリットは、日本から来伯した指導者から直接指導が受けることができ、さらにジュニア部門の優勝チームは日本へ行くことができる点である。登録チームは 1 ヶ月に 80 ヘアイス（約 4800 円）を会費として払っている。同協会には太鼓チームのイベント出演の依頼も多く、その場合は開催地に近いチームを選んで派遣している。該当するチームが結成間もない新しいチームであった場合は、距離的に近く熟練したチームを派遣することになっている。



地図：ブラジルにおける太鼓チームの分布

1-2 日本太鼓連盟とのつながり

ブラジル太鼓フェスティバル選手権

ブラジル太鼓協会は2004年から「ブラジル太鼓フェスティバル選手権」を主催している。ジュニア(17歳以下)、リブレ(18歳～39歳)、マスター(40歳以上)、大太鼓(一人打ち)の4部門で技を競うのである。ジュニア部門は優勝すると日本に行くことができるのであるが、なるべく多くの子どもを日本に行かせるために、優勝すると3回休場、つまり選手権に出られない、というのが同協会の決まりとなっている。ただし、日本での出場枠は、このときまでは競演会への参加ではなく、特別演奏という枠での参加であった。これ以降は特別演奏ではなく、競演会に出るかどうか、つまり日本のチームと同等の基準で競うかどうかを検討された。2011年は従来通りの特別枠での参加であったが、順位を競う対象となっている。

技能検定試験

チームの活動とは別に、打ち手個人の技能をみる検定試験もある。日本太鼓連盟で行われている技能検定を2006年からブラジルでも取り込んだのである。この時点では、Mさんはまだ来伯しておらず、検定の時だけ日本から指導員が派遣されるという体制であった。検定は5級からはじまり、1級が最も難しい。5級と4級はほぼ全員合格するが、3級になると難易度が高くなるという。ちなみに、2008年度の合格者は、5級が65名、4級が25名、3級が16名、2010年の時点では3級が31名、2級がパラナで1名合格しており、徐々に技能の習熟度が高くなっていることがわかる⁴。

ここで、日本で行われている技能検定について簡単に触れておきたい。母体となる日本太鼓連盟は、御諏訪太鼓の小口大八が中心となり、太鼓の全国ネットを作ろうと結成された組織である。教えるためのテキストや基準を作ろうと技能検定試験が始まった。この試験は5級から1級まであり、5級から3級までは筆記試験と実技試験が1回ある。2級は実技(2回)、筆記、レポート提出、1級は実技(3回)、筆記(2回)、レポート提出をクリアしなければならない⁵、専門講座(御諏訪太鼓をはじめ複数の太鼓について)も最低10時間受講しなければならない。現在、1級合格者は全国で43人(Mさんは43人目)いる。

1級技能検定に合格すると、指導員になるための段階に進むことができる。つまり、指導教官のアシスタントとして参加する資格ができるのである。5回アシスタントを務め、認められれば3級公認指導員となる。再度、5回アシスタントを務め、10年以上の経験と指導したチームが10チーム以上、各県支部の推薦がある、という条件を満たせば、2級公認指導員になることができる。1級も同様のプロセスをたどるか、何か大きなイベントを成功させると認められる。Mさんは百周年行事を成功させた功績が太鼓の指導者として日本でも認められ、1級公認指導員の資格が授与されたのであった。

このような日本のやり方を踏襲しているブラジル太鼓協会は、打法の教授法も打法自体も日本太鼓連盟のやり方が基準となっている。ただし、指導者のMさんによると、同じやり方を導入しても、受け止め方は日本とは異なっているという。検定試験は毎年1月と7月に行われるのであるが、1月はブラジルの夏休みにあたり、子どもたちは検定試験よりも遊び(海辺に遊びに行くこと)を優

先してしまいがちになる。日本の場合であれば、2級までとったのだから頑張っ上を目指そう、となるが、ブラジルではそうはならず上の段階へ進みにくい。

それでもMさんは、「太鼓は経験すると抜けられなくなる。言葉にうまくできないが、皆で一つのものを作り上げる喜びがある。それに、今まで周りから称賛されたことがなかった子が拍手をもらい、称賛される喜びを知ると感激する」と打ち手の変化を指摘する。百周年記念行事は太鼓に触れる大きなきっかけで、親も「百周年なら」と協力的だったようであるが、それが終わるとやめる子もいた。日系社会は百周年を特別な年として受け止めており、自ら積極的に行事に関わろうとする者にとっては、同協会のメンバーになることはイベントへの参加のための手段であったと言える。

2. 太鼓指導者からみたブラジルの太鼓

2-1 指導の工夫

同じ太鼓の指導であっても、指導を受ける側の文化的背景の相違によって教え方も変わる。Mさんはブラジルの事情にあわせて工夫を凝らしている。

(ブラジルは)音に関しての勘は良いですよ。だけど、間(ま)はめちゃくちゃ。たとえば、5分40秒から50秒で終わる曲が、4分50秒で終わってしまったこともありましたよ。120テンポを140テンポで打つから。日本の子と違うのは、日本は4拍子をちゃんとできる。4拍目をちゃんととるけど、ブラジルは最後の4分音符が8分音符になりやすい⁶。

指導をするときに気がついたんですが、良くみていると、聞き手じゃないほうがきちんと上にあがってなくて早く下りてくる。たとえば、右手がきき手だと、降りてきて、手首の返しもちゃんと振れている。左手ではそれが弱くて、(間が)短くなる。だから、きき手じゃないほうの手をきちんと高く挙げることで間がとれるんじゃないか、と考えて、そういう指導の工夫をするようになりました。間を大事にするのは大太鼓なので、大太鼓の普及をすれば、間の取り方もうまくなるように思います。大太鼓の一人打ちはまだ3回しかやっていない。女性に人気があるのは、斜め太鼓(太鼓を斜めに置いて打つ太鼓)。大きな振りが入れられるからでしょうね。

ブラジルで太鼓を最初に見たときは、扱い方がひどかった。皮は新しいのに、締めすぎて形が崩れていた。日本の太鼓に比べて音の領域が狭いので、ねらうところが少ない。でも、百周年のときはブラジル製の軽い太鼓でよかった。日本の太鼓は重くて移動に時間がかかるので、演奏する時間が少なくなったと思います。これからは桶の締め太鼓ではなく、音の良いもの(たとえば長胴太鼓など)を買ったほうがよい。数より質をねらうほうがいいんじゃないでしょうか。太鼓の大会で優勝した6チームがこれまで日本に特別出演で行ったけど、これから同じように大会で競うことになれば、質をあげないと難しいと思いますよ。

Mさんの指導のなかには、リズムなどの感覚のなかに現れる日本との相違を乗り越える工夫や、

太鼓の相違をプラスに受け止めつつ、試行錯誤する様子がみてとれる。それは形の上では日本の組織を取り入れつつも、太鼓の打法習得という中身に関しては、その場に合わせて臨機応変に対処していることがわかる。

Mさんは、2008年6月の百周年記念行事の参加と成功という目標を掲げ、2007年からの指導の照準を行事に合わせていった。最初の半年間は協会所属の全チームに挨拶まわりをし、日系人コミュニティを中心に1年間で4万キロ移動したという。2年間の目標は、①百周年記念行事の参加と成功、②太鼓の基本の拡充、③リーダー養成、④サンパウロ州、パラナ州以外の遠方地域に太鼓を普及すること、であった。①と②は1年目に重点的に行い、③も1年目から平行しつつ2年目にかけても行った。④は2年目の目標であったという。Mさんが総責任者を務めた百周年の千人太鼓は成功裡に終わり、また、先に挙げた表1にあるように、サンパウロやパラナ以外の州にも徐々にではあるが、太鼓チームができつつあることがわかる。彼の目標は概ね達成したといえる。

2-2 百周年記念行事の「千人太鼓」

百周年記念行事のときは「千人太鼓」と称して大人数での太鼓の演奏を行った。実際の人数は1187人であった。これだけの大人数のパフォーマンスが可能になるのは、太鼓協会所属チームには共通して習う曲があるからだ。基本となる曲を習得したうえで、各チームがオリジナルな曲を作ることもある。参加の条件は、自分で太鼓をもって入退場ができる(小さい子は小さい太鼓、小学生以上が大半)、太鼓を打てる、バランス感覚がよい(舞台は520mの長さがあるので、各自がその位置取りをきちんとできること)、といった3点であった。

配置は大太鼓が各チームの中心にくるが、その位置がずれると全部の配置が狂う。スピーカーを50台使い、チームごとに2人から4人のリーダーを置き(子どもの多いチームには4人配置)、舞台の両サイドで音を出さずに手振りで打ち方を指示させた。全部で60人程度のリーダーが配置され、彼らは実際に音を出さず、チームをまとめることに専念したのであった。

リーダーになる基準は、目くばり、気配り、その上で行動を起こせることだという。Mさんがブラジルにきたときには既にリーダーが育ちつつあった。各支部からの推薦でリーダー候補の名前があがってきていたので、その彼らにリーダーとしての指導をした。チームの人数の増減も、配置や全体に影響がでない限りは、すべてチームリーダーに任せたことで、Mさんの負担はかなり楽になった。それでも5回行ったりリハーサルはうまくいかず、新聞にも「本番には程遠い」と書かれるほどであった。前日のリハーサルでも70パーセント程度の出来であったが、本番では成功した。

日系人の多いチームでは、この記念行事に参加することを目標として太鼓を始めた者も多く、行事が終わると活動が停滞したり、太鼓をやめる者もいた。Mさんによると、この傾向は50代、60代の年配者に顕著にみられ、2011年度の時点でシニアチームとして活動を続けているのは、表の4、55、63のチームだけである。つまり、太鼓への関心というよりは、日系社会の一大イベントに参加したいという強い希望があり、太鼓はその窓口であったといえる。それでも、百周年記念行事は太鼓をブラジル社会に広める上では大きな役割を果たしたといえる。

2-3 指導風景からみた「日本」とのつながり

それでは太鼓の指導を受ける側は、太鼓の指導をどのように受け止めているのだろうか。Mさんの指導風景から考えてみたい。

2010年8月のある土曜日、筆者は指導に出かけるMさんと助手役の日系人女性に同行した。朝10時からのサンターナ文化体育協会での指導のために、8時30分に太鼓協会に集合していた。車で20分程度の会場に行くにはいささか早い時間であった。会場に到着すると、21人の生徒と同協会の会長をはじめとする役員や生徒の親に迎えられた。

生徒たちが通う学校は、当初は日系人のための日本語学校として始まったものであったが、今では非日系人も通う学校として認可されていた。その生徒が同文化体育協会の青年部として活動しており、60人近くの若者（非日系人が10人）がヨサコイソーランや太鼓に取り組んでいる。学校関係者や生徒の親がMさん一行のために、練習前に朝食会を催してくれたのだった。朝食会のことは事前に知らされており、そのために早めの到着となった。それぞれの自己紹介を簡単に済ませると、ホテルの朝食のような豪華な食事が始まった（写真2）。

食事が終わると、直接指導を受ける21人の生徒の後ろに関係者が座り、しばらく練習風景を見守っていた（写真3）。Mさんの指導は日本語で行われるため、通訳の青年がつく。助手役の女性は実践的な補助をしつつ時折通訳の補助もする。生徒の大半は日系人であるが日本語はあまりできないからだ。後ろで見ていた親たちは、昼食時間が近付くと食事の準備のために引き上げていった。筆者はそこで別の予定のために帰ったのだが、同協会のTシャツ等の土産品も準備されていた。Mさんによると、豪華な朝食や昼食が準備されることは珍しくないという。地方へ行けば、日系人社会総出で歓待されることも多い。つまり、受け入れる側にとっては単なる技術指導の場ではないのである。Mさんという日本太鼓連盟公認の1級公認指導員に直接指導を受けられるということは、「日本」との直接的なつながりを見出すことなのである。日系社会をベースにしたチームにとっては、



写真2：太鼓指導の前の朝食会



写真3：ブラジル太鼓協会の指導員による指導風景

日本太鼓連盟と直結するブラジル太鼓協会の存在は、太鼓の向こうにある「日本」を実感させてくれる窓口なのである。ブラジル太鼓協会は日本における組織以上の意味と価値をもっているといえる。

3. さまざまな太鼓チーム

3-1 「日本」に触れる場—福岡県人会の太鼓—

まず取り上げるのは、サンパウロ市内のリベルダージ（東洋街と呼ばれている地区）にある岩手県人会館のホールを借りて練習する、福岡県人会の太鼓チームである。福岡県人会の建物は市内の中心から少し離れた住宅地のなかの一軒家である。周囲が住宅地のため、太鼓の音には苦情が出る。そのため県人会館での練習はできないのであった。同県人会の太鼓は、日本に留学した人たちが2003年から始めたとされる。そこに県人会から派遣されて福岡県に短期留学した子どもが集まり、2008年12月から太鼓チームとしての活動が始まった。

8月のある土曜日、練習会場をのぞくと7歳から22歳までの男女8人が練習をしていた。後ろで付添の母親3人と父親1人が見学していた。指導するのは、太鼓歴4年の日系4世の男性Cさんと、太鼓歴8年の日系人の女性Dさんであった。指導する2人は日系ブラジル人ではあるが、日本語はほとんど話すことができなかった。Cさんは岩手県人会で、Dさんは福島県人会で太鼓をたたいていた。Dさんは福島県との関係は特になく、リベルダージでみたマツリの太鼓がきっかけだったという。

Cさんは、太鼓を教えるにあたって自分なりに道具を作る等の工夫をしている。インターネットで太鼓や笛の作り方を独学し、笛は水道のビニールパイプを材料に使う等、試行錯誤を繰り返して作っている。指導の際に彼が重点を置くのは以下のようなものであった。

太鼓＝日本ではないけど、日本のものの一つとして始めました。日本といえば、太鼓、漫画、音楽、食べ物に関心があると思います。

(太鼓で)一番大事なことは姿勢。立ち方。左足の膝をまげて前に出して、右足を後に引き、まっすぐにする。両足の間の角度は約45度。へその少し下に太鼓がくるように。大事なことは体の動き。喜びや自分の感情を表に出すように。グループによって感情の出し方が違う。グループなので一人一人が違うとおかしい。福岡県人会の太鼓は感情を出すようにしています。このグループはまだ新しいので、少しずつグループらしさが出てくると思います。一人一人のかたちをみて色を出そうと思ってます。

小学校のなかで太鼓を学ぶところはあるけど、大人は県人会に関係のあるグループがほとんど。ブラジルではプロでやっているのは2、3グループだけ。

メンバーは、県人会を介しての福岡への短期留学という経験を軸に、県人会を基盤としたつながりを活かして結びついている。一方で、指導者は県人会との関係は特になく、指導するCさんとDさんは、打つときの形や感情を引き出すことを重視しており、チームとしての個性を出す工夫はしても、「日本」や「福岡」に結び付けることはない。練習を見守る親たちは、指導に関してはCさんたちに任せきっている。親たちは、子どもの世代が非日系人化していくのは仕方ないことだと話す一方で、それでも結婚相手は日系人から選んでほしい、と親同士で話すことが多いと教えてくれた。つまり、どのように太鼓をたたくか、「日本」を表象することを意識してたたくことよりも、「日本」に触れる場として太鼓をみているのである。

3-2 ある太鼓チームの日系人女性にとっての太鼓

日系人が多く住む地域として知られるスザーノにも太鼓チームはある。スザーノ在住のIさん(1982生)は日系3世の女性で、太鼓を始めたのは20歳のときからである。彼女が太鼓を始めたきっかけや、太鼓のレベルの見分け方は、ブラジルの太鼓の拡がり方や独自性を教えてくれるものである⁷。

ある県人会の太鼓が盆通りと一緒にやっているのをみたけど、同じような太鼓でおもしろくなかったんです。そこに福岡からJICAの太鼓の指導者がやってきて、ワークショップがあったので参加したら好きになりました。それが2002年、20歳のとき。今はフクハクという太鼓チームに入っています。練習は週2回、金曜と土曜の夜、7時から10時までの3時間。週1回というところもあるけど、それは少ない。

(太鼓のレベルの見分け方)

基本は腕がまっすぐ、構えのときの動き、膝をつかって動く、動かないのはダメ。リズムのとりかたも大事。リズムを崩さないように、2つの太鼓の間を動くときに軸足を崩さないようにキレイに移動すること。一つのパートの間にリズムを崩さないようにすること。曲のア

レンジのうまさ、舞台の出入りの仕方も。バラバラにならないようにする。太鼓のセットの仕方も大事。短い時間できれいにセットできるかどうか。

太鼓をたたいたことがある人とならない人では、見方が違うと思う。自分も以前は、基本の部分は見ないで音やリズムだけを見てましたね。見た目がきれいかどうか。今は基本が気になる。他の、太鼓をたたく人の前で打つのは緊張しますよ。基本はA先生が教えてくれたときはやっていただけ、だんだんと基本はあまりやらないうちに曲を練習する傾向がでてきたみたい。でも百周年(記念行事に参加して)で基本の大切さを確認しました。

Iさんの説明にもあるように、JICAから派遣された指導員によるワークショップはここでも太鼓に触れる最初のステップとして大きく機能したようである。それまでも太鼓の演奏を目にすることはあっても、実際に太鼓をたたくには至らなかった人びとが、百周年記念行事への参加という具体的な目標を前に、身近なワークショップを通じて太鼓に触れたことは、大きな転換期であったのだろう。

太鼓チームのレベルをみるときの基準のなかに、舞台の出入りの仕方や太鼓のセットの仕方が入っていることも興味深い。これは百周年記念行事に参加できるかどうかを判断する際にも出てきた基準である。太鼓のセットの仕方や配置の感覚が重視されている。すなわち指導の際にも、そこに力が注がれるということであろう。そこには、日本と異なり、軽い太鼓が使用されるため、舞台にあがるときは各自が自分の楽器を持ってあがるという前提がある。使用できる楽器の特徴によって、レベルを判断する際の基準も日本とは異なっていることがわかる。

3-3 協会未所属の非日系人チーム

サンパウロにはブラジル太鼓協会に所属していないチームも複数存在する。その中で、非日系人中心のチームとして名の知れた雷神を取り上げたい。

雷神は岩手県人会が中心となり、そこに非日系人が参加してできたチームである。岩手県人会には1983年に岩手県庁から贈られた太鼓があり、後にJICAから派遣された指導者の指導を受けたことをきっかけにチームが結成された。そのときのメンバーが個人的なつながりで友人知人を誘った結果、非日系人の多いチームとなった。メンバーは非日系人7人、日系人5人である(2010年8月現在)。指導者はスザーノ在住の男性Kさん(1976生)である。Kさんの祖父母が福島県出身であり、Kさん自身も福島県人会と関係が深い。練習はサンパウロ市内のリベルダージにある岩手県人会館で毎週土曜の午後に行われる。

Kさんが太鼓に関わるようになった経緯は以下のようなものであった。福島市の民謡の先生が県人会創立80周年に来伯した際に、「近代太鼓(Kさんの言葉)」を教えてもらい、その縁で1998年に福島県へ1年間留学した。このときに太鼓を集中的に習い、ブラジルに帰国後は雷神の指導をしているのであった。

雷神では練習開始時に瞑想する。これはかつて岩手県人会の太鼓を使って活動していた、Kさん

の友人が病気で亡くなったことから、彼のために1分間の黙とうを捧げるのである。集中する意味もある。準備運動は「いち、に、さん……にじゅう」と日本語で数を数えながら行う。これ以外にも「せーの」「気合い」「先生」は日本語を使う。曲が終わったときの挨拶も「ふりゃ、せつ、ふりゃ」という掛け声のような日本語を使う。これはKさんが指導を受けた福島の先生が言っていた言葉を真似たものだという。Kさんによると、太鼓チームのなかでこの掛け声は雷神だけだという。

次に挙げるのは、雷神のメンバーの一人である非日系人の女性Jさん（1985生）と太鼓との出会いの経緯である。彼女は現在、専門学校で日本語を教える仕事をしている。彼女と太鼓の接点の背景には、アニメやマンガを通しての日本への興味、それが高じての日本語学習へと向かう過程がある。そこから生まれたネットワークが太鼓という新しい現象につながっている。

非日系人女性Jさんの場合

15歳のときにマンガに興味をもちました。テレビのアニメ、聖闘士星矢、セーラームーン、幽遊白書、ドラゴンボールを見て。2000年にドラゴンボールがポルトガル語に訳されたときに、それを読みましたよ。マンガを読んだときは、制服に驚いて、制服がおしゃれに見えました。

高校3年のときに、母の友人から教科書（ローマ字で書かれたもの）を借りて勉強して、その後、日本語の学校に入りました。最初はアニマンガ（日本のマンガやアニメを紹介する出版社兼店舗で漫画教室と日本語教室を開いていた）に通いました。マンガの本やビデオがありました。そこに日本語コース（1時間半/回）があって、6カ月間毎週土曜日に通いました。その後、大学で日本語科（サンパウロ大学）に入って勉強したけど、文法重視で話せませんでした。大学に入るとき、家族は反対しました。「将来、生活できないよ」と言われました。父は地質学の大学教授で母は歴史の先生。結局、一所懸命に日本語を勉強していたので、認めてくれましたけど。

ブラジル人と話すときと日本人と話すときは違う。自分は専門学校で会話の勉強をしたけど、ここでは態度や敬語に気をつけるように言われました。失礼します、おじゃまします、つまらないものですが、等の態度を重視していました。ブラジルの日系人と、日本人は違う。ブラジルの日系人はコロニアで育っているから閉鎖的。書道のために日本に留学していたとき、日本人はとても優しくかったですよ。

和太鼓はELさん（アニマンガで日本語を教えてくれた女性）に誘われました。彼女は岩手県人会で仕事をしてきたから。現在の雷神に入っている非日系人のメンバーは、全員アニマンガのときの友人ですよ。和太鼓はカッコイイ、集中して演奏するところやリズムがカッコイイ。マラカトゥ（ブラジルの太鼓）をブラジル人は好きだから。

さらに、雷神のメンバーの日系人の男性は、太鼓について次のように教えてくれた。

日系ブラジル人男性の場合

日本のイメージは、太鼓、アニメ、コスプレだと思う。ブラジル人は鼓童（日本の太鼓奏者のプロ集団）が大好き。力強さとテクニックの高さがすごいから。太鼓のグループが増加したのは2003年頃から。たたいっている人の90パーセントは非日系人だと思う。「先生・太鼓・

場所」があれば独立して活動可能です。たとえば、群馬県人会は先生がいない。福岡県人会は場所がないので、土曜日に2時間50ヘアイスで岩手県人会のホールを借りている。月曜日～金曜日は周囲に病院があるのでたたくことはできないから。すべての太鼓のグループが太鼓連盟に入っているわけではないんですよ。

以上のことから、まず岩手県人会でも JICA の指導が太鼓チームの発端となっていることがわかる。しかし、その後の雷神の活動では、メンバーも指導者も特定の県人会のつながりに頼っているわけではなく、自由な結びつきで集まっていることが明らかになる。なによりも、非日系人のメンバーの大半を結び付けた要素のひとつに、日本のアニメやマンガといった別の要素があったことは興味深い。日本への関心の有無に関わらず、ブラジルでは10年以上前から若者にマンガやアニメが浸透している。それらを通じて日本に関心をもった者であれば、太鼓への壁はより一層低くなるだろう。さらに、「たたいている人の90パーセントは非日系人だと思う。『先生・太鼓・場所』があれば独立して活動可能」というメンバーの言葉から、非日系人の多いチームの場合、「太鼓をたたく」ことを重視する傾向にあり、太鼓協会に所属することにそれほど大きな意味を見出していないことが考えられる。

4. ブラジル太鼓協会の意味付け

以上のような、ブラジルにおける太鼓協会と太鼓チームの活動を受けて、太鼓という文化が移動し定着、拡大していく過程を、活動に関わっている者たちの実践や場に目を向け、日系ブラジル人の新旧世代の意識変容と絡めて考察したい。

まず、ブラジルにおいては太鼓協会の存在は大きな意味をもつ。日本からの指導者が直接指導するワークショップの開催は、初心者にとっては太鼓に触れる最初の機会となっている。その経験をきっかけとして太鼓チームが結成される。太鼓協会を通じての直接指導は、日系社会にとっては単なる技術指導として受け止められていない。日本太鼓連盟公認の指導者の存在は、そのまま「日本」とのつながりとして受け止められる。技能検定試験のような日本と同様の制度を設定し、実行していくなかでも、そのつながりは実感されるのである。日系ブラジル人の若い世代が、日系社会への関心をもたなくなりつつあることが危惧される現状だからこそ、太鼓をたたいている子どもの親の世代はこのような直接接触を重視するのだといえよう。

さらに、2008年の百周年記念行事へ太鼓協会が参加したことは、日系人にとっては自分も参加できるという大きな目標となった。この目標を目指し、日系人主体の太鼓チームが増加し、協会への登録数も伸びていったことは自然であったといえる。しかし、日系人中心のチームであっても、百周年記念行事終了と同時に、活動が停滞したり、休会するチームが出てきており、皆が皆、日本とのつながりを強く希求しているわけではない。百周年記念行事だけが、その後の太鼓チームを支えているわけではない。百周年記念行事はチーム結成の大きな要因ではあるが、それだけでは多く

のチームの活動維持の根拠にはなりにくい。先述したように、指導を通して日本とのつながりを意識させる上で、太鼓協会という組織の存在は大きな意味を持つのである。

その一方で、太鼓協会を通じて日本の制度を設定しても、その実践の成否は目に見えない側面にかかっている。指導者 M さんの工夫に見られるように、日系人の若者たちの感覚が日本人とは異なること、むしろ非日系人と同様の感覚をもっていることが浮上することになった。リズムの取り方や、試験に対する心構え、休暇の取り方等の日常的なかにある相違が、わずかな指導の際に浮上していたのであった。ハードの側面を模倣すればするほど、ソフトの相違が明確になるという逆説的な状況がみてとれる。すべてにおいて日本を踏襲するのではなく、日本人指導者によるブラジルの事情に合わせた小さな工夫の積み重ねは、異文化接触における両者の交渉過程であるともいえる。太鼓に寄せる思いも、日系ブラジル人の新旧世代では異なっているが、太鼓に関してはそれを調整しているのも指導者 M さんの指導だといえよう。

リズムへの関心や、集中することから得られる解放感といった感覚を重視するのは日本とは異なる面ではあるが、その相違こそが非日系人にとっては魅力として受け止められ、ブラジル社会へも拡がっている。当初は日系人を中心に広がった太鼓であるが、次第にそのメンバーのつながりは非日系人にも拡がっている。既に日本のマンガやアニメによって日本語をはじめ日本への関心を持っていた者にとっては、太鼓はそれほど遠い存在ではなかったようだ。この場合は、太鼓協会の存在はそれほど大きな意味をなさない。彼らにとって必要不可欠な要素は「太鼓、場所、先生」となる。近い将来、その中から太鼓上級者が登場するであろうことは想像に難くない。雷神のような非日系人を中心としたチームに限らず、太鼓協会に属するチームにも非日系人は存在する。また、日系ブラジル人であっても、日本語を話せないメンバーも多い。その彼らがブラジルの太鼓の一翼を担っていくのである。そこには、日系社会にのみ閉じた太鼓ではなく、日系と非日系が融合したブラジルの太鼓が創造されることになるだろう。

注

- 1 アメリカにおける太鼓を取り上げた研究に比べ、中南米は近年になって太鼓が拡がり始めたこともあり、研究自体があまり進んでいない。その中で、小嶋はブラジルの日系社会消失の危機感を指摘し、若い世代と日系コミュニティをつなぐ装置としてのマツリを取り上げ、近年のヨサコイソーランと太鼓の人気について触れているが、紹介程度に留まっている [小嶋 2007]。
- 2 筆者が調査を行った 2010 年 8 月の時点では同協会の会長は Y 氏であったが、2011 年 8 月の時点では他の人物に交代していた。
- 3 この他に、ブラジルで太鼓を打った先駆けといわれる日本人の丹下節子（ブラジル在住）の「丹下節子太鼓道場」と、近年急速に知名度の高まった日系 2 世の木下節生の太鼓グループ「生（しょう）」の存在が知られている。彼らは同協会には所属せず、独自の活動を展開している。
- 4 2011 年 8 月時点では 2 級合格者は 9 名になっており、技の上達がよくわかる。
- 5 技能検定に際しては、3 級までは支部（地方）で開かれる講習会で受験可能であるが、1,2 級は全国講習会でなければ受験できない。
- 6 この点については、M さんの助手役を務め、実際に太鼓を打っている日系人の女性によると、日本では学校で音楽の授業があるため音符のことがわかるが、ブラジルには音楽の授業がなく、感覚だけに頼るからではないか、と推測していた。
- 7 太鼓の打ち手としての I さんの感覚は、同じく打ち手として、太鼓の基本的打法や姿勢、演奏、指導、地

域とのつながりについて体験記を報告した、木越の感覚に通じるものがある[木越 2011]。太鼓は身体的なパフォーマンスであるがゆえに、その実践者が共有する感覚についても考察の余地があるだろう。

参考文献

- 木越 治 2011 「体験的太鼓論」『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書』15 pp.167-184
- 小嶋 茂 2007 「ブラジル、パラナ民族芸能祭にみる文化の伝承-日系コミュニティの将来とマツリ、そしてニッケイ・アイデンティティ-」山本岩夫、ウェルズ恵子、赤木妙子編『南北アメリカの日系文化』人文書院 pp.273-288
- 小長谷英代 1985 「『伝統』のパフォーマンス-太鼓芸能における民族とジェンダー-」民俗芸能学会編『民俗芸能研究』pp.22-38
- 2002 「太鼓の表象とマスキュリティの構築」東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター『アメリカ太平洋研究』vol.1 pp.113-127
- 中野紀和 2010 「グラフィッチ素描-ブラジル・サンパウロのストリート文化-」大東文化大学経営研究所 Web 版リサーチペーパー No.2010-001 pp.1-19

謝辞：本稿のデータの基になっている調査に際しては、ブラジル太鼓協会の方がたに多くの御教示を頂いた。また、本研究は大東文化大学特別研究費（平成 21 年度～ 22 年度）の助成を受けた。記して感謝したい。